式辞

神奈川大学に入学された皆さん、また、更なる学問探究を志して神奈川大学大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。神奈川大学の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。また、御父母の皆さま、関係者の皆さまにも、心からお慶び申し上げます。新入生の皆さんが、本学でその能力を伸ばし、人として、研究者として、大きく成長するよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。

式典に先立ちご覧になられたように、本学は、創立者の米田吉盛先生が、「質実剛健・積極進取・中正堅実」の建学の精神に基づき、いかなる社会変化にも対応して、主体性を持って新たな価値を創造する「人をつくる」ことを目指し、本学の前身である横浜学院を桜木町に創立されて、今春で、９０周年を迎えます。以来、卓越した研究の叡智に基づく教育重視の伝統を堅持して、近年では、「約束します、成長力。―成長支援第一主義―」と表現したコンセプトのなかで、「人をつくる」高等教育機関としての誇りと自負を持って、新入生の皆さんを学問へといざなう準備を整えております。

また、この度、創立１００周年後の本学の永続的な進化に備えて、開学の地に隣接するみなとみらい中央地区に新しいキャンパスを２０２１年４月に開設する準備を進めています。この新しいキャンパスには、現在検討を進めている日本と国際が融合する新しい学部を開設するとともに、外国語学部と経営学部を移転し、5,000 名程度の学生が学ぶ高層ビルのキャンパスを構想しています。外国語学部と経営学部に入学された皆さんは、４年次には、ここみなとみらいの新キャンパスを中心に学ぶことになります。国際的企業が集約された横浜の最先端地区に本学が立地することは、地政学的な総合判断からも可能性に満ちたものであり、すでに、みなとみらいに立地する国際企業から本学との包括提携の提案があり、来年度から、皆さんの教育に資する具体的な取り組みを始める予定です。

近年、大学の評価は、第三者機関による世界基準に則して示されるようになっています。たとえば、昨年秋にイギリスの高等教育情報誌である、タイムズ・ハイヤー・エデュケーションが発表した「T.H.E. 世界大学ランキング２０１８」に、本学が世界の上位５％内の大学としてランキングされました。このことは、本学が世界有数の総合大学の１つだということを意味しています。この高い評価の根底には、本学の研究と教育力の高さがあります。本学には、文系理系ともに、未来社会を先導する一流の研究者が集っています。大学の評価は、世界基準では、入試の偏差値などではなく、社会に貢献できる研究と教育力にあるのです。このことを良く理解してください。

新入生の皆さんは、本学での学問、すなわち、学びて問うことを通して、生涯の糧となる自ら考える力を培い、世界の本質と真理を探究する必要があります。
本学での「学問」とは、これまでの学習と何が違うのでしょうか。高等学校までは、身につけるべき知識は、学習指導要領であらかじめ定められており、それぞれの知識を学び取ることが基本とされてきました。

一方、「学問」では、知識をただ学び取るだけでなく、文字通り「学びて問う」、学びかつ、自ら考え、問う、つまり疑問を持つことが求められます。これまで継承されてきた知識をただ受け入れるのではなく、その真偽を自ら主体的に問いかけ、自らのいわゆる血肉にすることが求められるのです。学ぶだけでは、他人の知識を代弁し、その権威に安住するだけとなりかねず、また、学ばずに問うだけでは、世界を知らずして、主観を客観と錯覚して、自己肯定に陥りがちになります。「学びて、そして問う」ことが大事であり、教員と、そして学友との討論などを通して、主観のみによる独善を乗り越え、冷静に分析と総合を目指すことができるのです。大学は、これらの作業の場といえるでしょう。

一般に学問とは、積み重ねられてきた知識の中から自らの課題を発見し、その課題を解決するために、地道な調査や研究を行い、一つの仮説を提示、検証し、自らの新しい学説を提示することとされています。研究者である大学教員は、自らの長年にわたる研究課題との奮闘とその成果をもって講義室に立ち、皆さんに知識を授けます。同時に、教員は、講義室で展開される学問について、皆さんがさらに学びたいと思う心を起こすことを目指して教壇に立っています。

しかし、皆さんが学ばねばならないのは、その知識もそうですが、むしろその教員の研究に取り組む姿勢であり、人類の幸福の総和を増やそうとする精神かも知れません。私もそうですが、大学の教員は、遠い自らの学生時代に、先学の学問への情熱とそのひたむきさに心を揺さぶられた経験を持つはずです。大学の講義室は、連綿と続く人類の叡智の継承の場であるとともに、学問を志し、学ぶものの精神を含めた継承の場でもあるのです。

さらに、本学では、伝統的に、「教養教育」を学問の根幹に据えてまいりました。教養教育は、人としての生きかた、物事の善し悪しなどを判断する、いわば生涯にわたる人としての基礎となる能力を培うものであり、専門的学問探究が陥りがちな狭い了見や行き詰まりを超越して、総合化・体系化に結びつける力を持つものでもあります。専門偏向に陥らないための広い古典教育や、専門を超えて対話をすることで得られる広い人間関係の形成は、学問の総合と体系化に向けて、大学という長い歴史が生み出した最良の成果ともいえるでしょう。

また、自らの専門的知識と能力を、どう使うのか、誰がために、何のために使うのかを方向付けるのが、その人の教養といえます。例えば、高い専門性を持つ弁護士の資格を得たときに、弁護士としての専門知識と能力を、救済すべき弱者と社会に貢献するために使うのか、そうでないのかは、その人の教養に依存します。このようなことからも、「教養教育」はとても大事だと考えております。

ここで、教養科目の１つである文学について考えてみましょう。文学は、作者が全霊を費やして一大事業として自らの思想を表明したものであり、人間行動の礎となる思考力と心情や精神の深みを題材にしています。また、今後皆さんが直面する現代的な課題においては、人間の心情と精神が複雑に絡んでいることが少なくありません。このことからも、文学で追体験した心情や精神の動向は、多くの学びに溢れ、皆さんを人として成長させるとともに、現代社会の課題解決のための有用な気づきや糸口を皆さんに与えてくれるでしょう。

さてここで、本学の誇りうる研究者の一人である諸田 實名誉教授をご紹介したいと思います。諸田先生は、本学創立の年と同じ１９２８年にお生まれになり、３０歳代で『ドイツ初期資本主義研究』でご出身の東京大学の大塚久雄先生のもとで学位を取得されて以来、近世欧州経済史の第一人者として「学びて問う」ことに対して実に真摯に取り組まれ、今年１月にも、『異色の経済学者――フリードリッヒ・リスト』をご刊行なされました。リストは１９世紀ドイツの経済学者で、イギリスに対してドイツ国民を守る国民経済学という概念を打ち立て、その主著『(政治) 経済学の国民的体系』は、経済学の古典として、特に近年は、経済のグローバル化への対抗軸として世界中で読まれている重要な書物です。諸田先生は、国民経済の本質とリストの実像と主著の謎に迫る卓越した知見を新たにご提起なされました。

神奈川大学の歴史を紐解けば、諸田先生をはじめ、網野善彦、宮田登、大熊信行など数々のすぐれた研究者教員を輩出しております。こうした先学に共通していえることは、本質を求め真理に対して「質実剛健・積極進取・中正堅実」に研究と教育を極めんとした点にあります。神奈川大学の研究と教育は、自由にあるべき姿を建学の精神よろしく独立して考えることを旨としております。この点からも神奈川大学は、日本の誇れる大学の一つであるとはっきりと申し上げられます。

新世紀に入り、私たち人類はますます多元的な価値観と複雑な社会構造のなかで生きていかねばなりません。また、人工知能をはじめとする科学技術の急速な発展に伴う資本主義社会の変容にも備える必要があります。不確実な時代だからこそ、本学での「学びて問う」なかで、未来社会を担う見識と「自ら考える力」、そして本質を見極める力を培ってください。

皆さんは、一人ひとりが、尊厳ある人間であり、かけがえのない、慈しむべき「あなた」という唯一無二の人間です。そして、皆さんは、この恵まれた大学という環境を大いに活用して、たった一人の「あなた」しかできないことを見出すことがきっとできる、と私たち教職員は信じています。

神奈川大学は、新入生の皆さんが、学問にしっかりと取り組むとともに、新たな友人と出会い、語らい、課外活動等の様々な可能性に挑戦するなかで、自ら学び、考え、成長するために必要とされる最高の教育と環境を提供してまいります。

最後になりますが、新入生の皆さんが、「人をつくる」大学である神奈川大学の学生としての誇りと自信を持って、健康に心がけて、実りの多い学生生活を過ごされますよう心より祈念して、私からの式辞といたします。

2018 年 4 月 3 日

神奈川大学長　兼子良夫